

第1回 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会

- 日 時 平成25年7月2日(火) 14:00~16:00
- 会 場 仙台市役所本庁舎2階 第一委員会室
- 出席者 阿部重樹委員、稲葉雅子委員、大草芳江委員、大滝精一委員、木村彩香委員、佐藤正実委員、高橋あゆみ委員、高橋悦子委員、西大立目祥子委員、間庭洋委員、宮原育子委員、村上タカシ委員、本江正茂委員、渡邊浩文委員
- 欠 席 増田聡委員
- 仙 台 市 奥山仙台市長、鈴木復興事業局長、高橋復興事業監、鈴木次長、梅内参事兼震災復興室長
ほか
- 議 事
- 1 開会
 - 2 市長あいさつ
 - 3 委員紹介
 - 4 委員長選出および副委員長指名
 - 5 委員長あいさつ
 - 6 議事
 - (1) 委員会の運営について
 - (2) これまでの震災復興メモリアルに関する取組状況について
 - (3) その他
 - 7 閉会
- 配布資料
- 資料1 委員名簿
- 資料2 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会設置要綱
- 資料3 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会の運営について(案)
- 資料4 これまでの震災復興メモリアルに関する取組状況について
- 資料5 仙台市議会質疑
- 参考1 震災復興メモリアル等検討委員会の Mission
- 参考2 他都市等のメモリアル事例集

1 開会

○事務局(梅内参事)

それでは定刻となりましたので、ただ今から「第1回仙台市震災復興メモリアル等検討委員会」を開催させていただきます。私は復興事業局震災復興室の梅内と申します。議長が決定いたしますまでの間、進行役を務めさせていただきます。

はじめに資料の確認でございます。お座席に、座席表と本日の次第、資料一覧、資料ナンバーを付しまして資料1~5、参考資料1、2、そして冊子となっております仙台市震災復興計画を置かせて頂いております。資料の不足がございましたらお申し付けください。

本日は、増田委員からご欠席のご連絡を頂きましたが、資料1記載の皆様は委員をお引き受けいただいております。皆様の机の上に、本委員会委員の委嘱状を置かせて頂いております。この委嘱状をもちまして委員の皆様への委嘱に代えさせて頂きたいと考えております。ご了承のほどお願い申し上げます。

次に資料2をご覧ください。本委員会の設置、運営に関します要綱でございます。本委員会の検討事項としまして震災メモリアルプロジェクト、海辺の交流再生プロジェクトに関することを定め、また委員長については委員の互選のこと、会議については委員の半数以上の出席をもって開催すること等を定めているものでございます。

本日の会議の成立でございますが、増田委員からご欠席の連絡を頂いております。全15名中14名の皆様にご出席いただいておりますので、定員の過半数を超えております。要綱第5条第2項により定足数を満たし会が成立していることをご報告申し上げます。

会議の公開、非公開の取扱につきましては、後ほど議事の中でご審議頂きますが、本市では原則公開としております。正式な決定を行うまでの間、公開という形で進めさせて頂きたいと考えておりますのでご了承をお願い申し上げます。それでは開会にあたりまして、仙台市長奥山よりごあいさつを申し上げます。

2 市長あいさつ

○奥山市長

まずもって皆様方には大変お忙しい中を本検討委員会の委員をお引き頂きましたことに心から感謝を申し上げたいと思います。

間もなく東日本大震災から2年4か月という時期を迎えるわけでございますが、私どもはこの間何よりも被災された方々の暮らし、生活の再建が最優先であるという考えのもと新しい宅地の造成、そして防災集団移転事業、災害復興公営住宅の建設などに、鋭意取り組んできたところでございます。

市民の皆様方の大変大きな頑張り、そしてまた全国からの様々なご支援等もあり、幸いにも現在仙台では概ね順調にこれらの事業が進んで、様々な公共事業が今海岸東部地域や被災した宅地の再建についても進められているところでございます。そして、私どもは改めて震災で亡くなった方々に対する本当に痛ましい思い、失われた故郷に対する大変な哀惜の念、この震災の中で我々が得た新しい教訓や未来に向かって「かくあるべきではないか」という思い、そうしたものをどのようにして共有し、世界に向けて御礼の気持ちやメッセージとして伝えていくか、そのような多くの課題によりやく向き合うべき時期が来たという風に思っております。

本検討委員会におきましては、そうしたことにつきまして忌憚のないご意見を頂きながら、仙台市の復興計画の中にもこのメモリアルプロジェクトがある訳でございますが、何ぶん復興計画をつくりましたのは発災年度の11月ということでありまして、まだまだ我々もその後どのようになっているか見通しが立て難いところでございました。改めて現時点の状況の中で委員の皆様から「こういうものを検証すべき」、「こういうことを残すべき」、「こういうことを発信できる場が必要ではないか」、そういったご意見を頂いて、また多く市民の皆様、議会等のご意見を頂きながらこれを成案として練り上げ、後世に示すべきメモリアルの事業に整えていければと思っております。

大変課題が大きいこの委員会ではございますが、皆様方のお力を頂いて、ともに進めて参りたいと考えておりますのでどうぞよろしくお願いをいたします。

3 委員紹介

○事務局（梅内参事）

続きまして、委員の皆様をご紹介させていただきます。資料1の名簿順にご紹介をさせていただきます。それではお願いをいたします。

阿部重樹委員でございます。

稲葉雅子委員でございます。

大草芳江委員でございます。

大滝精一委員でございます。

木村彩香委員でございます。

佐藤正実委員でございます。

高橋あゆみ委員でございます。

高橋悦子委員でございます。

西大立目祥子委員でございます。

増田聡委員は本日ご都合により欠席となっております。

間庭洋委員でございます。

宮原育子委員でございます。

村上タカシ委員でございます。

本江正茂委員でございます。

渡邊浩文委員でございます。

4 委員長選出及び副委員長の指名

○事務局（梅内参事）

次に委員長の選出をお願いしたいと思います。要綱の第4条でございます通り、まず委員長を委員の互選により決定いたしまして、その後委員長に副委員長を指名して頂きたいと存じます。委員長の選出につきまして、委員の皆様でご推薦のある方、ご発言をお願いしたいと存じます。

○間庭委員

先ほどご挨拶がありました通り、重要なテーマの委員会です。名簿を拝見しましたところ女性も多くいらっしゃいますので、お隣にいらっしゃる宮城大学の教授の宮原委員を委員長にご推薦申し上げたいと思います。皆様のご賛同が頂ければ幸いです。

○事務局（梅内参事）

ただ今、委員長に宮原委員というご意見がございましたが、皆様いかがでございますでしょうか。

〔一同拍手〕

○事務局（梅内参事）

それでは宮原委員に委員長をお願いしたいと存じます。宮原委員、委員長席へのご移動をお願い申し上げます。

委員長には副委員長をご指名頂くということになっておりますが、如何いたしましょうか。

○宮原委員長

副委員長の指名につきましては、事務局と調整したうえで改めて指名させて頂きたいと思っておりますがいかがでしょうか。

○事務局（梅内参事）

では、副委員長につきましては、委員長とご相談のうえ決定をいたしまして次回の会議でご報告をさせて頂きたいと考えております。

5 委員長あいさつ

○事務局（梅内参事）

それでは、ただ今委員長に選出されました宮原委員にごあいさつを頂戴したいと思います。

○宮原委員長

皆様改めまして、こんにちは。宮城大学の宮原と申します。この度は仙台市の震災復興メモリアル等検討委員会の委員長を仰せつかりました。よろしくお願ひしたいと思います。

今回、震災の後、仙台市の方で市民の皆さん、それから市役所の皆さんも、一丸となって復興に邁進されてきている中で、先ほど市長が仰った通り、色々市民の方達が体験、経験された貴重な記憶、これから復興していく姿も含めて色々な形で発信をしたり、貴重なものを残そうとされております。メンバーの皆さんも震災復興の計画の策定委員の方もいらっしゃるし、現在も現場で、市民の皆様のために飛び回っていらっしゃる方々もいらっしゃいます。ご自身で沢山のアーカイブを作られている方々もおられますので、こういった多様なメンバーの中で、良い形で仙台市のメモリアルが形づくられていくような形で議論が進められれば良いと思っております。是非、委員の皆様からも沢山のご意見を頂戴したいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

6 議事

(1) 委員会の運営について

○事務局（梅内参事）

これからの進行につきましては宮原委員長にお願いしたいと存じます。よろしくお願ひ申し上げます。

○宮原委員長

それでは議事に入りたいと思います。まず、議事の運営をしていくための必要事項についてお諮りをしたいと思います。はじめに、会議の公開、非公開を決めなければなりません。事務局の方から案が提示されておりますので、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（梅内参事）

それでは資料3をご覧ください。

本会議の運営についての案でございます。会議の公開、非公開につきましては、先ほど申し上げましたけれども、原則公開としたいと存じます。ただし、個人情報に関する内容等、特定の場合につきましては、委員長から委員のみなさまへお諮りをし、非公開とできるということにしたいと存じます。

また、議事録を作成しますが、議事録には委員長及び委員長の指名委員1名のご署名をお願いしたいと考えてございます。

会議スケジュールでございますが、概ね2か月に1度程度の開催を予定してございまして、次回の協議内容及びスケジュールにつきましては委員長と事務局の協議によりこれを決めさせて頂きたいと考えてございます。以上でございます。

○宮原委員長

ありがとうございました。ただいまの説明につきまして何かご質問はございますか。

事務局から説明がありました様に、仙台市におきましては公開が原則となっておりますので、事務局案の通り原則として会議は公開としまして、審議の中で非公開とするという部分が出てきました時に、その都度皆様に御諮りして決めていきたいと思っておりますがいかがでしょうか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○宮原委員長

ありがとうございます。それではそのようにさせて頂きたいと思えます。また、議事録につきましても事務局案の通りでよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○宮原委員長

ありがとうございます。それでは本日の委員会の議事録の署名は名簿順ということで、早速なんですが阿部委員の方をお願いいたします。その他運営につきましてですが、何か皆さんからご質問やご意見ございますか。

(2) これまでの震災復興メモリアルに関する取組状況について

○宮原委員長

次に本委員会のミッションの確認と、これまでの震災復興メモリアル等に関する取組状況などにつきまして事務局が資料を用意されておりますのでご説明を頂きたいと思えます。

○事務局（梅内参事）

資料4につきまして、パワーポイントを用意しておりますので、前方のスクリーンをご覧ください。見にくい場合にはお手元の資料を同時にご覧いただければと思えます。

まず、要綱第2条のところで掲げました復興計画に掲げる100万人の復興プロジェクト等のこの会のミッションでございます。

美しい海辺を復元する海辺の交流再生プロジェクトといたしまして、仙台市の海岸部のシンボルでございます防災林の復元、及び歴史的にも大きな意味がある貞山運河の復元活動。

そしてメモリアルプロジェクトとしまして震災記録の集積と活用、アーカイブ、情報発信の拠点整備、東部沿岸地区へのモニュメント整備、そして子ども達をはじめとする幅広い市民との協働による推進ということを掲げているところでございます。これを中心にご検討を頂きたいと考えております。

震災発生後、様々な取り組みがあったところでございます。例えば、女川町にありますメモリアル公園の予定地です。まちの中心部がやられ様々な遺構が残っておりますが、2年の月日が経って各施設の損耗も著しく進んでおり、今後どうしていこうかという様な課題があると伺っております。次は陸前高田市の1本松でございます。24年5月に枯死が確認されておりますが、薬剤の注入等によりまして、シンボルとしてこれを復元したものでございます。

国や民間企業でも様々なアーカイブの取り組みがされてございます。東北大学さんの「みちのく震録伝」、国立国会図書館さんの「東日本大震災アーカイブ」。こちらの構築に当たりましては、本市にもご相談がありましたし、メディアテーク等とも意見交換をさせて頂いております。この他にも河北新報の「震災アーカイブ」等、様々な企業などがアーカイブを進められております。続きまして、本日ご出席の佐藤委員の20世紀アーカイブ仙台さんの「3・11キヨクのキヨク」

になります。その場で撮る、集める、語る、聞く、編集する、観せるといった様な手法で収集から発信までを一連で取り組んでおられるところでございます。

こちらの取り組みは本日ご出席の村上委員が進めておりますアートによります「大震災復興支援プロジェクト MMIX LAB」です。その活動の一部でございますが、宮城県石巻市での様々な遺構やそのデータの保存、下は七ヶ浜町の漂流物等の様子でございます。

次は、西大立目委員も関わっていらっしゃいます仙台市市民文化事業団の「RE:プロジェクト」です。沿岸部の被災地で津波により壊滅的な打撃を受けておりますが、ここがどういう場所でのような人々の暮らしがあったのか、地域資源の再発見、再認識、再考に向けて取り組んでいるものです。

また、こちらは、大滝委員が取り組んでいる「音楽の力による復興センター東北」の活動でございます。兵庫県立芸術文化センターなどを参考にしながら様々な音楽による復興に取り組んでおります。仙台フィルでも震災直後から2年間で280回以上も復興コンサートを開催しているところでございます。

この様な文化面の取り組みに限らず、スポーツの方でも被災者の方を勇気づける取り組みがなされております。

こちらはベガルタ仙台ですが、地震津波の被災地の子ども達を招待する様な取り組みを進めるとともに、東京電力女子サッカー一部マリーゼが休部したことを受けまして、ベガルタ仙台がこれをベガルタ仙台レディースとして地元で復活させるという取り組みがなされています。

こちらは、楽天イーグルスの取り組みでございます。やはり子ども達を定期的に招待したり、また震災直後には嶋選手会長の感動的なスピーチも記憶に新しいところでございます。

bjリーグでも東日本大震災祈念ゲーム等を実施するなど、文化スポーツといったところでも様々な取組、発信がなされているところでございます。

このような各地での保存、あるいはこれから保存していこうという様な取り組みがございます。震災の記憶、震災前の暮らしや人々の思い、こういったものをしっかりと留めて、内外に向けて発信していく取組が重要でございます。復興のシンボルともなろうかと思っております。

本員会の設置の趣旨として記載してございますが、検討委員会につきましては、復興計画に掲げるメモリアルプロジェクトの実現を目指しているもので、行政計画を策定するための委員会ではございません。各委員がこれまで携わってこられました活動、知見をもとに、市民の皆様とともに震災復興メモリアルに関する取組を具体化させていくため、ご意見を伺いたいという趣旨から設置するものでございます。

本日は各委員によるブレインストーミングを行い、第2回目以降これを整理集約して、検討テーマごとにご議論を深めて参りたいと考えております。

この様なミッションをまとめましたのが参考1としてお配りしましたA3の資料でございます。

1番2番のところにつきましては、これまでスライドでご紹介したところですが、市民の皆様が復興の道のりをともに歩くためのシンボルづくり、あるいは震災の記憶を踏まえた新たな仙台をいかに発信していくかという事を視点に、このプロジェクトを市民の皆様とともに推進していくためのシンボルといたしますか、統一的なテーマのあり方、各テーマの実現に向けた具体化についてご検討頂きたいと考えております。

この検討委員会のご議論に加え、市民の皆様、津波被災地域の地域住民の皆様の意見をお伺い

しながら検討を進めたいと考えており、主な復興テーマ5つを設定しております。先程の防災林の復元、貞山運河の再生、利活用、様々な情報の発信拠点整備、東部地域のモニュメントのあり方、市民の皆様と協働による推進の5つに取り組んで参りたいと考えているところです。

主な検討テーマについてご紹介いたします。

東部の防災林ですが、沿岸約9 km以上に渡る海岸防災林が壊滅的な打撃を受けました。戦後、仙台が空襲を受けまして杜の都の伝統的景観を再生しようということで青葉通り、定禅寺通りに小さなケヤキを植えて現在の杜の都になっております。いかにして近代的な都市に生まれ変わるかという様な思いを込めた植樹であり、私どもも東部海岸林につきまして、仙台が新しい防災都市として生まれ変わるために、市民の皆様とこれをどうやって進めていくかということを考えたいと思っております。

次は、防災林の主管官庁であります林野庁さんの考え方でございます。青森から千葉県約140 kmに渡る防災林を再生していく、これにあたっては地元住民の皆様、NPOや企業との連携した植林活動をしていきたいという風に表明されています。写真では各地域の植樹の活動をお示しておりますが、仙台市では荒浜小学校北の部分で一昨年植林した状況が示してございます。最近では一部枯死も出ておりますが、海岸防災林の復旧に当たりましては何度も植え替えをしたり、様々な手入れも必要でございます。あれだけの海岸林にするために、これまでも様々な地域の皆様、色々な方々の思いや活動が重なってあれだけの林になっておりました。東部の緑の復元に当たり、例えば公益財団法人「瓦礫を活かす森の長城プロジェクト」をはじめとしてNPO、あるいは新聞社など、多様な取組みがなされております。23ページは、仙台市での考え方でございます。仙台市としても、国内から個人民間企業など様々な方から70件以上に渡り植樹や苗木の寄贈などのお問い合わせ、お申し込みを頂いております。この様な善意を生かしながらより多くの市民の皆様とともに東部の緑の復元をどうしていくかを考えなければなりません。また、東部地域は海岸防災林に限らず、農地も広大にございましたし、仙台の古くからの住居として居久根といわれる防風林がございました。そういった里山の風景、仙台の原風景のようなものがあつた地域でございます。こういったものを幅広く再生していくといった取組みが重要ではないかと考えているところでございます。

次に貞山運河でございます。先程ご紹介しました「RE:プロジェクト」の中でも貞山運河がこの地域におきまして地域の交通、食料の獲得場所として様々な暮らしに不可欠だった様子が描かれています。仙台地区は新堀と呼ばれます運河がございましたが、全体で約50 kmに及ぶ日本一の運河群があつた訳でございます。こちらが津波により大きな被害を受け、水門等が完全に破壊されています。今、地域の安全という面で水門等を一部補修しながら、これから宮城県を中心にこれを復元していこうとしております。

宮原委員長も参加された宮城県さんの「貞山運河の復興ビジョン」でございます。運河につきましてはこれを未来につなぐため、物理的な再生については県が行う、この活用については地域の意見を参考にしながら一緒に取り組もうといったことになっており、仙台市としても、これをどのように活用していくかを検討していくことは重要だと考えております。

次に様々な情報の集積、発信手法、拠点の整備でございます。仙台メディアテークの方でも市民の皆様から頂きました映像や写真、音源などを収集し、これをウェブサイトで発信をしています。また、仙台市では発災後1年間の記録ということで、行政情報を記録誌として取りまとめました。各地域から視察が相次いでおり、全ての公共団体の方に送らせて頂き、各地域の参照にし

て頂きたいと思っております。また、ホームページ等で「仙台復興のキセキ」というような形でコーナーを設けて発信をしております。この様な取組みを、市民の皆様の取組みとも連携しながら進めて参りたいと考えております。この点に関する他地域の拠点の取組みにつきまして参考2として別冊子にまとめております。代表的な「人と未来防災センター」のような拠点もございまして、中越の様な小規模な施設をネットワーク化した取組みもございまして、財源の問題等、実現性も考えなければなりません、このような点についてもご意見を頂きたと考えており、後ほど参考2をご高覧頂ければと思っております。

次に、遺構保存、あるいはモニュメントの考え方でございます。こちらは地域の皆様、あるいは小学校の生徒さんが屋上で津波の避難をしました荒浜小学校でございまして、現在も一定の耐震性があるということで、津波避難ビルを兼ねて現地に保存をしております。また、周囲には住宅の基礎跡が残っておりますので、どのように保存活用していけるかということも大きな課題でございまして。

こちらは昨年度東北大学の本江委員等と一緒に検討したのですが、この地区の遺構保存の可能性を研究したものでございまして、深沼海岸という海水浴場もございましたので、海、あるいは貞山運河と連携し、また、地域で営まれていた農業の体験できるような生活エリアとして再生してはどうかという内容で取りまとめが行われています。この他に中野地区や藤塚地区といったような津波で流失した集落がございまして、ここで亡くなられた方々の思い、地域の生活を残すようなモニュメントをどのように残していくかということも大きな課題でございまして。

最後に他地域のメモリアル事業として現在、陸前高田市で検討されている公園事業、あるいは宮城県石巻市で検討されている復興のシンボルとなる様な公園のあり方について記載をさせて頂いております。このように様々なテーマがございまして、項目ごとに皆さんの思いが違うといった、デリケートで難しい面がある取組みということでございまして。

最後に資料5をご覧ください。この項目に関しまして仙台市議会でも様々な議論がこれまで積み重ねられてまいりました。概要を抜粋したものでございまして、被災された地域にあったそれぞれの歴史、お一人お一人の大切な生活の思い出をどうするかという事業であり、皆さんの思いをよく汲み取って取り組むことが重要だ、あるいは仙台という交通の利便性が高い地域での事業になるため、今回の大震災、復興の様子を内外に発信するには非常に適地であるので、そういった優位性も生かして取り組みをすべきだ等様々な意見が議会でもございました。

本員会への検討のミッション等、多岐に渡り、雑駁でございまして、状況についての報告をさせて頂きました。

○宮原委員長

ありがとうございました。ただ今の当検討委員会のミッションについてご説明がありました。

復興計画に掲げられていますプロジェクトの具体化に当たり、震災直後の状況と、2年4か月近く経った状況と随分変わってきているところもあります。その過程をずっとご覧になっていらっしゃる皆様もいらっしゃるの、そういった視点を加味しながら、市民の方達と一緒にこのプロジェクトを推進していくということを大切に、どの様にプロジェクトの具体化に向けて取り組んでいくべきか、そういった点を中心に議論して頂くということになります。

先程も梅内さんが指摘されたように、計画を策定するということではなくて、様々な案を出して頂く場であるということです。スライドで触れて頂きましたが、皆さんが幾つかのプロジェクトで関わっていらっしゃるということもご紹介頂きましたので、これを踏まえて議論をしていき

たいと思います。

先程のご説明につきまして何かご意見、ご質問はありますでしょうか。

○本江委員

終わらせ方についてですが、概ね年度内という話があったと思います。何か色んなイメージ、意見が出て、それで終わりということでしょうか。それとも何か資料をまとめて終わるか。あと何回位やってどう終わるのかということをはじめに確認しておきたいのですが。

○宮原委員長

分かりました。室長お願いします。

○事務局（梅内参事）

終わらせ方につきましては、検討が進んだ段階でご相談させて頂きたいと思っておりましたけれども、やはりご議論の内容につきまして報告書のような形でまとめたいと考えております。諮問に対する答申や、計画という形にはなりません、一定のとりまとめをしまして、仙台市がこれから取り組んでいく事業の中に活かす、その後市議会のご議論とか地域の皆様のご意見を加味しながら、という形になりますが、実現に向けてご議論の内容を踏まえ、実際に動かして参ります。その際の道標として、一定の冊子の作成を目指したいと考えております。

○宮原委員長

この点はよろしいでしょうか。

これから委員の皆様にご意見をお伺いしたいと思います。今回は初回ということですので、各委員の皆様から順番にご意見を伺いたいと思います。

先程の論点に関するご意見の他、復興に関する様々な研究をされていらっしゃる方もいらっしゃいますので、その様なお立場からご発言を頂ければと思っております。

なお、時間の都合もあるものですから、恐縮ですがお一人につき2、3分位という時間制限でお願いしたいと思います。

名簿の順番がついてまわって申し訳ないですが、あいうえお順で阿部委員さんからスタートでよろしいでしょうか。言い足りないことがございましたら、後段で戻りますのでよろしく願います。

○阿部委員

それでは、私の体験した範囲というふうことで、かなり限局的な話題をお話させて頂くことをお許し頂きたいと思っております。

私はボランティアに関心を持って、関わってきております。今後は、恐らく町内会などの「共助」に重きが置かれることになっていきます。レベッカ・ソルニットという人が「災害ユートピア」という本を書いた。世界各地で古今東西、こういう大災害が起きるとその直後に非常に共助の活動が盛り上がるのです。けれども、それはすぐに消えていってしまう。それで、「災害ユートピア」という言い方をしているのですが、レベッカ・ソルニットは最後の方で新しい扉が開かれたという表現で本を終えるわけです。申し上げたいことは、折角ですから共助、共生の原理にもう少し傾いた、あるいは共助を組織化したような模索をすることの意義が大きいような気がしています。

それで、今回のこのメモリアルにもう少し近づけて申し上げれば、最近共助の仕組みボランティアバブルがはじけた。それが、その後どうなるか、恐らくそういう思いを持っている人は多

いのではないか。一方で、今日私どもの大学の木村委員も来ていますが、その中でさらに頑張っている人達の声と、バブルがはじける、あるいはユートピアになりつつある中で、頑張りながらこの後どうなっていくそうなのかというのをこの3年間の中に見つけ、まとめておくということも大切ではないか。具体的にこんなことがあった、そんなことがあったということは部分的にかなりまとめられてきているので、将来を少し展望しながら今のような点に焦点を当ててメモリアルを作るといふことも意味があるのではないかと思います。以上です。

○宮原委員長

ありがとうございます。スタートから貴重なご意見を頂きましてありがとうございます。次に稲葉委員をお願いします。

○稲葉委員

私は、株式会社「ゆいネット」という人材教育の会社をやらせて頂いておりますが、同時に株式会社「たびむすび」という旅行の会社もやらせて頂いております。今回、こういった委員会に参加させて頂くということで、他の地域から来られる方のご意見を、少しご紹介して自己紹介に代えたいと思います。

今現在、遠くは九州、広島などから、東北を訪れている方がいます。その中で、大きく二つ感じていることがあります。一つはこの震災にあたって「東北」にいなかった方々が、何かしら一緒に歩むための思いを共有したいと強く思っている。失礼になりますが、かつては瓦礫の山を見ると「皆さん大変だったんだな」という思いがあって、それが自分と被災地を近づける何かであった、そういうものが瓦礫であったり、基礎になっただけの土地であったりということだったのかなと思います。

もう一つは、この災害で「東北」にいなかったからこそ何かを学びたいという方が非常に多くて、その方々が今、学びにつなげる物の一つとして南三陸町の「語り部さん」という方が、外からお見えになる方にお伝えするツールだったりします。これが何年か経ちますと、きっと語り部さんのように人が語るのではなくて、何か違う形になるのではないかと思います。何十年、何百年経っても後々の方に語り継がれるような何かがあるのではないかと思います。

東北仙台に住んでいる人間として、何か後世に伝えるために一つでも提案できたらいいと考えています。

○宮原委員長

どうもありがとうございました。それでは続きまして大草委員さんをお願いします。

○大草委員

皆様こんにちは。私は有限会社「FIELD AND NETWORK」及び「ナチュラルサイエンス」というNPOをしている者です。

NPO 法人ナチュラルサイエンスの方では、毎年科学のイベントを開催しております。色々な研究者や科学者の人達がプログラムを持ち寄って開催する様なイベントをしているのですが、実は今回の震災の前に1千年に1度来るといわれている津波についての実施的な調査から、「こういうことが起こっていますよ」という動きを震災前から発表されていた研究者の方がいらしたんですね。その時はまさか津波が、自分達が生きている時代に来るなんて誰も思っていなかったもので、「そういう科学的な見地があるんだね」と知識として情報を得た訳ですが、やはりあのようなことがあって、その後の皆様の反応は、同じものを見ても違う風にリンクをかけるようになってきたと感じます。

何を言いたいかといいますと、今回後世に記憶や思いを残す、そういうことをミッションにしていく委員会ということですが、やはり「物」だけあっても、自分のものとして捉えることがすごく難しいと思います。そこをどういう風に工夫していくかというのがすごく大事になってくると思っておりまして、自分もそういうやり方を是非考えたいと思っています。その一つの切り口として、例えばサイエンスという切り口から、何かを伝えるような工夫を出来るようなものを考えたいなという風に、今回は思っております。そういった視点で参加したいと思っております。

○宮原委員長

ありがとうございます。大草委員は、子ども達にそういったことを伝える事業をされていますよね。それでは続きまして大滝委員、お願いいたします。

○大滝委員

東北大学の大滝です。先程のパワーポイントの資料の10枚目のところにご紹介頂いたのですが、「音楽の力による復興センター東北」の理事長を務めています。そこで少しこの活動についてご紹介をしながら、意見を述べさせて頂きたいと思っています。

この「音楽の力による復興センター東北」というのは、元々震災直後の2週間後に仙台フィルハーモニーや地元の音楽家の皆さんが、被災地に行って演奏活動をして被災した方々を励ますという、被災地に寄り添った音楽活動を支援するという形で作られたものです。パワーポイントの資料にも3月現在で280回と書いてありますが、仙台フィルは5月の時点で300回以上、被災地で演奏会をするという取り組みをずっと続けてきています。最初はそれを財政的、ないしは人的に支援する活動からスタートしたのですが、現在ではそれだけではなくて、被災地で色々なスタイルのコンサートや演奏活動する時のモデルコンサートの開発の様な事とか、国内外から沢山の音楽家とかオーケストラが入ってきて活動しているわけですが、その方々をつないでいくコーディネート活動とか、震災の関係で統廃合される小学校、中学校の校歌をオーケストラの演奏でCD化するという「心のランドマーク計画」と言っていますが、そういう活動もしています。

そういう活動をする中で、音楽の力、あるいは広い意味での文化、芸術の力が大きな推進力になるということは改めて申し上げるまでもないのですが、そういう活動も踏まえ、そういう心のメモリアルとして、ホールを仙台に作っていくという運動も推進しようとしております。

先程名前が出てきました兵庫県立芸術文化センターは、阪神淡路大震災の10年後に兵庫県西宮市に作られた非常に規模が大きなホールです。専属のオーケストラと芸術監督を持つというのですが、そこまで実現できるか別として、メモリアルホールとして仙台あるいは宮城、東北というものの復興を更に推進していくシンボルとして、こういうものを実現していきたいという運動を、芸術文化センターの方々の協力を得ながら進めております。もちろんこれは、ハードの事業という側面もあるのですが、何といたっても被災地の皆さんと一緒にこれを作っていくという運動を盛り上げていこうということで、「復興提言シンポジウム」を今まで2回開催しております。こういう動きをもっと大きなうねりに繋げていければと考えていて、市民運動としてもメモリアルホールというものの実現を更に進めていきたいなと考えています。以上です。

○宮原委員長

ありがとうございました。続きまして木村委員お願いします。

○木村委員

東北学院大学4年の木村と申します。よろしく申し上げます。

私は、震災以降、ボランティアを通して宮城県内の避難所をまわらせて頂きました。

県内のいろんな地域で、多くの住民の方々とお話ししていく中で、心の変化が実際に出てきていることを知りました。先日も気仙沼の大島の方と2年ぶりにお電話をさせて頂きまして、やはり声が明るくなってきていて、気持の整理ができつつあり、自分の中の決心がやっと出来るようになったとおっしゃっていました。モニュメントや震災の記録をどう残していくかといった時には、個人が経験した違いはあれど、震災以降のそれぞれの思いが離れていくのではなくて、実際にシンボルという言葉もありましたが、何か一つに向かっていけるものを作っていければと思っています。

実際に地域ごとの特徴もありますので、その点も考慮しながら、これから色々なものを作って実際に伝えていくことが必要なのかなと思います。また、今回のプロジェクトを進めるに当たって、色んな方を巻き込んでいければと思っています。簡単ですが以上です。

○宮原委員長

ありがとうございます。それでは次に佐藤委員お願いします。

○佐藤委員

皆さんこんにちは。「20世紀アーカイブ仙台」では、震災前は仙台の古い写真や8mm映像を収集保存して皆さんに見て頂く、思い出を語って頂くという活動をしておりました。震災後は、震災の状況を皆さんがデジタルカメラや携帯で撮ったものを収集させて頂き、それを記録して、まとめさせて頂いています。

私達がやりたいなと思っているのは、「震災は大変だった」と過去形で終わらせたくないということで、また、他の地域からしたら「大変だったですね」と他人事として欲しくない。自分の事として考えてもらう。そんな写真や体験談を通して、「他人事ではなく自分事」をキーワードとして活動させて頂いています。

地域アーカイブ、それから震災アーカイブどちらも柱になるものは、人の思い出だなと思っており、それらをどういう風に記録していくのかということが、写真とか映像だけではなく、そこにストーリーを持たせるための語り、思い出というのが重要になってくると思っています。被災地の復興は10年では終わらない。アーカイブも10年では到底終わらないと思います。

大学生と一緒に3.11ツアーとか、メディアテークさんの方では毎月1回、写真を撮った方々をゲストに招いて公開サロンをやったり、また先月から「3.11しみんアーカイブ」という部活動もスタートさせたところなのですが、市民と一緒に3.11を記録し続けていきたいと思っています。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは高橋委員さんお願いします。

○高橋委員

今、一般社団法人「ワカツク」という所で起業しているのですが、この場では仕事と個人のことに関し、2点からお話したいと思っています。

仕事としては、震災後、弊社は「つなプロ」という名前で、NPOと被災地をつないで支える合同プロジェクト、沿岸部を中心に避難所に学生、若者がアセスメントしに行って何が必要なかというニーズの洗い出しから、NPOにつなげる事業をやっています。このボランティアを私達の方から送り出していたということがあったのですが、そういった中で、関西の方から学生が来ていました。今もボランティアが来ているのですが、どちらかというと地元の学生さん、若者というより、県外の人達の方が多く来ているという印象が強いです。地元の学生さんは決して関心がない訳ではないとは思いますが、やはり、息長い活動にするためにも、地元の学生にどうや

って関心を持ってもらえるかということと、戻ってきたいなと思ってもらえるものをつくってあげるかということ。若者が一旦就職して東京とか都市へ出ていくのですが、戻ってきたいという学生も沢山いるんですね。そういった中で、戻ってきたいと思えるまちをどうつくるかという観点が重要なのではないかと考えております。

もう一つ、私自身、中越沖地震と岩手宮城内陸地震にボランティアで携わっていたのですが、そういった中で、自分の土地で大きい地震が起きるとは思っていなくて、それがとても悔しかった思いがあります。私と同じように、今震災活動で携わっている学生さんも時間が過ぎてしまうと、また忘れてしまうのではないかとこのところが恐怖でもあるし、危機感を持っているところです。私自身も若者と接していますので、若者の視点というところなどを取り入れて、発言をしていきたいと考えております。

○宮原委員長

ありがとうございました。続きましてこちらの列になります。高橋委員お願いします。

○高橋委員

「冒険あそび場せんだい・みやぎネットワーク」という、子ども達の居場所、遊び場を通して暮らしの中に子ども達の未来を…と考え活動をしています。

海岸公園冒険広場の指定管理をしています。

被災した荒浜地区と井土地区の被災地にあって、公園の一部は被災を受けましたが冒険広場の姿は奇跡的に残されました。仙台平野と太平洋を望む沿岸部の環境に生かし来園者と一緒に公園づくり（運営）に取り組んできました。予想外の来園者をむかえ交通渋滞をおこし地域の方々に大変なご迷惑をお掛けしてきましたが、行政関係部所や警察・消防署等と相談や提案等をしながら公園運営を行ってきた経緯があります。多くの来園者を迎えていた公園との運営と関わり方を仙台市内に広げていきたいと考えていました。そんな時期に震災に遭い冒険広場は休園。当会の考え方を試されるかのように「さあ、この場所は使えませんよ。あなた達はこれから何をやりますか。」という問いかけにあった気がします。

震災直後から、若林区六郷、七郷、宮城野区の避難所もまわりました。公園のマークが目印となり、避難所に身を寄せる沢山の人から「冒広さんですね。皆さんはどうなったの。大丈夫でしたか。」と駆け寄ってきてくださいました。私達は避難所の状況を知り、避難所の近くで子ども達の居場所として「遊び場」を開きました。

この2年間の間に公園や仮設住宅、小学校の校庭という場所で遊び場を展開しています。

当初、子ども達の置かれている状況が気にかかっていたのですがあそび場が開かれると子ども達がやってきて多くの大人たちをつないでくれたのです。あそび場は大人達の居場所にもなっていました。そして、仮設住宅に移る被災者と一緒に仮設住宅内で遊び場を開き、同時に大人達への支援活動を始めました。「おらほ（仮設）に住んでいる子どもでないべ。」と大人が抱える諸事情も多々ありましたが、回数を重ねているうちに「あんた、どこの子どもや」と子ども達へ声を掛け、「あそごの孫か」という地域を感じさせるような会話が行き交うようになりました。次第に大人も子どもも顔が見える関係ができてきました。また、被災地となった海岸公園冒険広場では巡回時に津波の痕跡を残す作業や沿岸部を定点観察することで被災・復興状況を記録として残す等、今、私達ができることに取り組んできました。

震災後「子どもと教育」を軸足に被災地支援の取組みをしてきましたが、学校の門戸を広げて頂いたことは特に大きな力となりました。海岸公園の復興計画については、関係する方々が一緒

になって、「仙台の復興計画は自信を持てるこれだ」というものを提案して行ってほしい。結果は数年では見えてこないと思います。数十年もかかることと思います。でも、今を生きている人たちが未来へ向けての姿勢を子孫に伝えていくことはできます。これからの復興への考え・場所に関わりながら育ちあっていく体験する流れをつくる事で、今回の大震災を乗り越えていく、これから生きぬく力に繋がると考えています。

未来への夢はしっかりと描いていきたいと思います。被災地域の住民の力も借りながら、復興へ向かって進んでいる状態です。

○宮原委員長

ありがとうございました。現場の貴重なお話をありがとうございます。次に西大立目委員お願いします。

○西大立目委員

私は、資料の9ページ目にあります、仙台市市民文化事業団が企画されている「RE:プロジェクト」に関わっていて、被災地で被災された方々に会って、お話を聞いて、それをもとに地域の生活なり、文化を拾う、集めるという様な作業をしています。色々考えるとところがあるのですが、仙台市東部地域は、歴史的なことを調べると1611年の慶長の津波の後に新田開発をして今のような姿になったのです。ですからこのメモリアルもそうだと思うのですが、どういう時間の幅でメモリアルの復興を考えるかということで中身は全然違ったものになると思います。

今日は素晴らしい方々がお集まりなのですが、私は、この中に歴史家が一人もいないというのがちょっと不安というか、ちょっと心配でもあります。今とこれからだけで考えていくのか、あるいは500年位の時間の幅を取るのか、あるいはもっと地殻変動みたいなことを含めて何万年という幅で復興計画を考えるのかということで、そこがすごく違ったものになってくる。現場に行ってお話を聞くと、間違いなくあの地域は慶長の津波がくる400年という時間の復興のプロセスの中であって、2011年3月11日がきたということを感じるのです。その位400年間一生懸命耕していたりして生活してきたわけですが、なぜ肝心な津波のことを私達は簡単に忘れてしまったのか。メモリアルに何を込めるかという所をきちんと考えていかなければいけないんじゃないかなと思います。

今日は色々な活動をなさっている方が集まっているわけですが、私は、この中に地域の方が一人も入っていないということがとても心配です。市長さんを前に大変恐縮ですが、仙台市の復興はとても早く、皆さんとても頑張っておられるのは分るのですが、十分に地域の方々の言葉に耳を傾けているかどうかという、私はちょっと足りないのではないかなという気がしています。メモリアルの中身を検討する時に、そこに被災されて家族を亡くされたり、お隣の方がいなくなってしまった経験をなさったり、そういう方達の思いをこの中に込めて頂きたいなと考えますし、どうして私達が簡単に災害を忘れてしまうのかという所も含めて欲しいなと思います。それで農村地帯だったわけですが、そこの話を聞いていくと、冒頭に阿部先生がおっしゃった共助とか共生とか今どんどん失われつつあって、私達が忘れてしまった暮らしぶりが今でもあって、そこを丁寧に掘り起こすことは、きっと間違いなく未来につながっていくと思います。長いスパンでとらえて、まず私が亡くなった方達の思い起こすための場所にして頂きたいという感じです。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは、問庭委員お願いします。

○間庭委員

仙台商工会議所という立場で参加させていただいています。仙台市さんも同じですが、大震災があった時、当然、足元の商工業、経済、商店街という地域で、支援、再生等様々なことをしてきた訳ですが、同時に仙台の場合は、東北に45の商工会議所がありまして、例えば石巻、気仙沼、岩手の方でも本当に大変な被害にあり、今も苦しんでいる地域、一生懸命復興再生しようとしている所が沢山ございます。その時に、そういった被災地ほど地元でやらなければならない事が山の様になって、しかしやれることは限られています。人や色々な条件があつた時はありましたから。そうすると仙台が全国とのパイプ役になったり、ニーズを汲み上げるとか、被災の状況を発信したりという、間を取り持つような役割も足元の課題と同時並行であつた訳です。

そういうことを踏まえた時に、足元のことをしっかりやらなければいけないメモリアルと同時に、広域的な視点でのメモリアルというものも視野に入らないと、現実にそぐわないことになる可能性があると思うのです。

今、被災地の方に行きますと、例えば工場が出来たとか、新しい会社が始まったとか、雇用が発生している部分もあるのですが、この間も新聞報道がありましたが、必ずしも被災者が戻ってくるとは限らないんですね。経済が大事なのは当然ですが、それだけではなかなか戻っていきたくない、暮したいとはならない。私どもとしては、経済は基礎の一つではあるけれども、それだけでは決め手にならない。もう一度まちを再生しようとした場合に、先ほども委員の方から出ていましたが、震災復興の局面は2年半経った時に、文化とかスポーツというのが、結構大きな役割を果たす、それによる人のつながりがすごい励みになったんですね。お互いに苦しい中で助けて頂いたとか。こういったつながりというものは、非常に大事な宝だと思うので、未来に向かって是非継承していきたいものの一つなのであります。

仙台が置かれているポジションといいますか、東北における使命を考えた時に、例えばプロスポーツが被災地でありながら頑張っている、あるいは文化が様々な働きをもたらしたこともありましたが、このような作用が仙台市内だけではなく東北一円にも大きな働きをしたということなども大事なメモリアルの要素だと思っています。これについては、是非ハードだけではなくソフト面も含めてもっと発展させていきたいので、メモリアルプロジェクトのテーマにしっかり位置づけたいと思います。その際、東北という視点を是非加えて考えていければと思います。

○宮原委員長

どうもありがとうございました。それでは村上委員さんお願いします。

○村上委員

宮城教育大学の村上です。また、一般社団法人の「MMIX Lab」の代表もしております。メモリアルプロジェクトですが、まず仙台で被災した直後、私達はアート系なんですけど、福祉系であったり、困窮者支援であったり、また災害支援系のネットワークであったり、様々なNPOがバードつながつて物資が急に来るようになりました。それで石巻などに物資を運んだり、施設をまわったりしていたのですが、そういう活動をする中、日々状況が変わっていきました。

パワーポイントでいいますと8ページに色んな震災遺物や、震災遺構があるのですが、これらは翌週に行くと無くなっていると、そういう状況があつて、ガレキが処理され、綺麗になっていくのはいいのですが、何事もなかったように片づいてしまうのはちょっと違うのではないかと疑問を持ち始めて、こういうものを残してはどうかと聞いてまわったのです。最初は警察に行きました。全然相手にされませんでした。最後に話を聞いてくれたのは、仙台市の市民協働推進課で

した。11年6月に公文書をだしてもらい、腕章をもらって合法的に回収することができるようになったんですね。こういう形で協働の事業がスタートしています。今それをリサーチして、また展示報告をしたり、地元の人達を含めたコンセンサスを形成するようなトークセッションやヒアリングなど、色々なことをやっています。

必要なこととしては過去を忘れない、風化させないという側面と、やはり未来へ向けて発信していく、伝えていくべき遺構が必要だと感じています。震災メモリアルについてはハード面であったり、アーカイブもあると思うのですが、ソフト面で市民といかに協働して後世に伝えていくかというプロジェクトが必要になるのではないかと思います。写真や映像、証言、科学的なデータなどは、もちろん必要です。ただ、実物というものが、やはり後世に伝えるメッセージ性としては非常に高いと思うのです。広島原爆ドーム然りで、あのようなものは実際に残すと決定するまで50年以上かかっているわけですが、今は、早い段階で住民の意思を聞いて、特定の人達の心の傷を慮って、撤去されたり無くなったものが非常に多いのです。もう少し次世代のことを考えて、長期的なビジョンで、消極的な保存でもいいので、まずはそこに残すと、そういうところから始める必要があるのではないかと思います。

また、実際に仙台市でもやっているもう一つのプロジェクトとしては、「桜3.11学校プロジェクト」というのをやっています。これは、津波の遡上ラインの学校に桜を子ども達と植樹して、それを鎮魂と希望を込めたプロジェクトとしてやっていこうというものです。七ヶ浜から始めまして岩手、福島、この間は八戸、仙台は蒲生地区の岡田小学校でやったのですが、あの地域の人達と一緒に植樹をやったのですが、こういう目印といいますか、サインというのが具体的に分かりやすいものだと思うのです。今後、防災、減災を考える場合に、どんなにパソコン上で見れるコンテンツを作っても、パソコンを見られない人もいっぱいいる訳です。やはり地域の中で、防災意識を持つ仕組み、花見をしながらでもいいのですが、そういうものが必要ではないか。例えば、仙台市百万都市ですから「桜3.11百万人プロジェクト」を立ち上げるとか、先ほどのメモリアルで言いますと、ただ箱ものをつくってそこに何かを入れるというだけではなくて、これからの世代、また南海トラフなども指摘されています。そういう所に写真であったり、データであったり、こちらが持っている色々な震災遺物のコンテンツであったり、そういったものを詰め込んだものでメモリアルキャラバンをやるとか、そういう具体的なプロジェクトを展開していくことが効果的なのではないかと思います。

また、世界にアピールするという点では、国連防災世界会議というのが決定しました。ぜひ、そういう場でこういうプロジェクトを紹介してもらえたらと思います。

○宮原委員長

ありがとうございました。それでは続きまして本江委員お願いします。

○本江委員

本江です。私は東北大学の工学部におりまして、専門は都市と建築のデザインということをやっておりますので、ハード寄りのバイアスがかかっていると思って聞いて頂きたいと思いますが、この会議で議論しなければいけないだろうと思うことは2つ、一つは時間のことで、もう一つは誰と作るのかということです。

一つ目の時間のことは、今の村上先生や西大立目さんが指摘されたことですが、一つはどの位のタイムスパンのメモリアルのつもりなのかということです。400年忘れないようにしたいのか、千年か、差し当たり30年位ですかという事。どの位の射程でこれを忘れないのか。それは

かなりリアルに話をしておかなければならないだろうなと思います。もし長期的ならば、それが持続する仕組みが内包されていないといけませんから、今日のスライドの33ページに荒浜の調査をご紹介しますが、これは何かを作って終わりというのではなくて、それが地域に定着して持続するにはどういうビジネスモデルがいるのかというようなことを併せて考えています。そういう視点が必要だということが一つ。

それからどの位の時間をかけて作るかということですが、5年で作るのか、30年位かけてだんだんやりましょうという事なのか、長く続けるのか。何しろ一つドンと作ればこれで忘れませんということはあり得ないということは、ある程度共有されていると思うのですが、その持続のさせ方について考えるということが非常に重要なことだと思います。村上先生も言われたように、「今決めろ」というと本当に今困っている人達、あるいは今抵抗がある人達を慮って片付けてしまうことがあって、心情は分るけれどもそれでいいのかという思いも正直あります。言葉は悪いかもしれないが、しばらく見えないようにしておいてホトボリが冷めたら徐々に見られるようにするか、そのような手法もあるかなと思ったりします。

次に、誰とつくるのか。僕自身もデザインをやっていますので、何かを作るとなると専門家と協働でやるということになると思うのですが、そのメンバリングをどうするかということについて何かアイデアがあるだろうということでもあります。

3つ位あるんです。一つは、僕がやっている仕事の一つで「仙台スクールオブデザイン」というのがあります。これは地域のデザイナーとかクリエイティブな仕事をしていらっしゃる方を集めた教育プログラムですが、そこで「3.11 シンサイカルタ」というものをつくりました。震災の教訓をみんなに伝えたい、でも本を読んでおけといっても読まないのがカルタを作って子ども達に遊んでもらって、カルタの文句なんかは自然と覚えるし、なんとなく時間が経ってからフツと思出すみたいなこともあるねというので、カルタを実際に作ってみました。仙台には沢山デザイナーやイラストレーターもいますので、その方々と一緒に絵札を作ったり、いい文句を子ども達と一緒にワークショップをやりながらつくったりするチームと作業をしました。仙台地域には沢山のクリエイティブな仕事をしている人達がいるので上手くその力を結集して地元発のデザインでメモリアルプロジェクトをやるというのが重要なことになるというのが一つ。

二つ目は我田引水で恐縮ですが、仙台で「仙台デザインリーグ卒業設計日本一決定戦」というのを10年以上やっています。これは建築学科では卒業設計というのを4年生の一番最後に課題でやります。このイベントは、日本で行われている卒業設計を集めたコンテストで、乱暴ですけども日本一を決めましょうと名乗っているんですね。大体700を超える位の作品がメディアテークに集まっていて、日本にある建築学科ほぼ全てからエントリーがあります。2000人~3000人位がその決勝戦の日に来る非常に大きな、メディアテークでも一番動員があるイベントだと思います。建築教育業界は狭いですが、そこでは野球の大会が甲子園と呼ばれているのと同じように、ラグビーの花園と同じように、これは「仙台」といわれて、建築を勉強している4年生は「仙台に行く」というのが何となく話題になる、そういう場所なんですね。そうすると日本で建築を勉強した人みんなにとって仙台が思い出の場所になっている。これを上手くメモリアルの仕事と結びつけて、例えば日本一になった人に、副賞として仙台でメモリアルプロジェクトをやる市長賞を設けるとか、公園の中に何かつくる権利が与えられてデビュー作が仙台にある、「あの人の最初の仕事が仙台にあります」みたいなことができないかなと思ったりもしています。建築を勉強している人達にとっては、仙台は既に特別な場所の一つなので、このポテンシャルを生かす企画

を作れないかなというのが誰とやるかの二つ目。

三つ目は、先程間庭さんが仰ったように、仙台は広域と接続する責任があります。やはり世界的な規模での情報発信をやるのは仙台市なんです。その時のアイデアですが、東部地区の公園をデザインするとして、普通に発注して入札で決まりましたみたいなことでもいいのかという話です。世界中の公園やランドスケープデザイナーが英知を結集して作った、時間をかけてアイデアを育てていきながら作るという様な、何か世界のデザイナーを巻き込んだ形でやっていくというプロセスをセットできれば歴史に残るといえるのか、伝説になる。出来上がったものもそうですし、それを見に来る理由を作るということになるので、二つ目の話、誰と作るのかというところで上手くデザインするために地元を巻き込み、且つ世界的なデザイナー達を巻き込んでやっていくことが出来ないのかと、それを議論させて頂ければと思っております。

○宮原委員長

具体的な提案も頂き、ありがとうございました。それでは渡邊委員お願いします。

○渡邊委員

東北工業大学の渡邊でございます。最初に申し上げたいのは、やはり大変だなあとということですね。震災復興メモリアルの検討といいながら、まだメモリーになっていない。現在進行形の話なので、それぞれの皆さんがそれぞれなりの思いがある中で議論するのは、良いことだと思うのですが、大変さがあるなという風に率直に思いました。私は本江先生に近く、工業大学の建築学科の教員ですが、都市ですとか地域の環境学というものを専攻していて、基本的には物なりイベントなり、何かを介して新しい何かを考えるタイプなのですが、復興メモリアルの具体的話が色々あるのですが、それぞれに目的や意味合いが違う気がするんですね。

先程本江先生から「時間」と「誰と」というお話がありましたし、西大立目さんからもございました。村上先生から未来への発信という話がありましたが、僕の専門に近いところから言うと、科学的な事実としての震災というものを記録するというような目的もきっとあるだろうし、そこからどう仙台なり東北の我々が立ち上がろうとしているのかという取り組みそのものも意味を持っていると思いますし、どこを目指しているかという目標をシンボライズするものも意味があると思うんですね。本江先生の時間と誰に付け加えて、目的と対象と手段という所も、本当はそれを総合することがより良いと思うのですが、そういった整理も必要なんじゃないかと思えます。そこには、市民の方々一人一人、現在進行形ですので、きっと思いもありますし、全国世界から様々な支援をしてくださった方々の思いもあると思います。そういうものもトータルで考えていく必要はないのかということですね。

あとはもう一つ私は、復興計画の方にも関わっておりましたので、その関わりから、やはりもともと仙台市さんが取り組んでいる総合計画など、既存の計画をこのメモリアルの事業に上手くリンクさせること、連携させることは検討の余地はないのかなと思います。例えば東部地域の緑の復元とありますが、「農」という字が出てこないのはいいのかなと素朴に考えたり、荒井という拠点になる様な所に整備が一方で進んでいますので、既存の整備計画等とメモリアルも、決して無関係ではないのではないのかなと感じた次第です。

○宮原委員長

どうもありがとうございました。

これで13人の委員さんから一通りお話を頂きました。私からもお話しをしたいと思います。私は地域資源をいかした観光交流の研究をしているんですけども、今回の震災の中で、この

メモリアルのお話を頂いた時に、西大立目さんと同じで、時間とか歴史の部分をどういう風に捉えていくのか、というのが大きなテーマじゃないかと思っています。と言うのは、震災が起きる前までは、ほとんどの方が仙台平野に津波がくるという認識を持っていらっしやなかった。ですが、震災後はですね、沢山の研究者の方、それから歴史家の方達も一緒になって、工学や科学の方と歴史家が一緒になって、仙台平野の津波のメカニズムを明らかにしようとしている。やはり私達が学んだことということは何なのかというところで、しっかり外の方達に伝えられるようにしていくという部分を、仙台市の柱にして欲しいと思うんです。1611年の慶長の地震、津波から、研究者の人によっては、大体200年に一回位、仙台平野に津波が来ているんですよと。だからそのスパンから言うとこの地域は津波の常襲地だと、そういう認識をもって暮さなければいけないという人もいらっしやいます。

市民の人にも、よそから来た人にも理解して頂く仕掛けが必要で、400年とか200年、長く続く仕掛けってなんだろうと言うと、例えば地名ですね。それから神社、お宮さんなんかもそうですね。お宮さんは、今回かなり津波を免れているところも多いという風に聞いていますので、そういった所を今一度大切にしていくこと。

それから、記念日です。記念日は、仙台市でも制定されていくと思うのですが、その中で例えばその日は1日非常食とか、ガスとか水を使わないで、市民全員が、その日を思い出すような形で過ごすとか。

後は子ども達に伝えていく部分で、やはり教育の中でメモリアルをどう擦り込ませていくかということも重要ではないかと思えます。避難訓練や講話を聞くと言ったようなこともそうなんですけれども、やはり忘れていってしまうのが当たり前の部分を、仙台市のこの取り組みの中で、次の世代に継いでいけるような仕組みというのにも必要だと思います。それがハードの整備でそれが可能になるのか、それとも人の暮らしの中に擦り込んで、それをきちっとつないでいくという、その部分を見つけれたら、とてもいいのではないかと思いました。

最近、宮城県のバス協会さんのモニターツアーで、学生と一緒に牡鹿半島とか石巻をまわったのですが、今、宮城県内の観光バスのガイドさん達は、今回の震災で起こったことをガイドのコンテンツの中にきちっと入れています。かなり正確な数字を入れ込んで、感傷的にならず、それから刺激的な話としてではなく、非常に上手に一般の方達に分るような形で伝えてくださっています。多分そういった方達が、最初によその方と震災の話に触れ合う可能性があるので、観光協会の中でもメモリアルを意識しながら、大事な事を伝えてもらうこと、その意味で観光の方も一緒にやっていくということが重要ではないかなというふうに思いました。

皆さんから沢山のご意見ありがとうございました。

本日は奥山市長さんにご出席を頂いておりますので、これまでのご意見を伺っての御感想や御意見がありましたら一言いただけますでしょうか。よろしくお願ひします。

○奥山市長

今日は、皆様方が携わって頂いていた様々な活動や事業を通してのご経験を踏まえ、メモリアルというテーマに関する貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございました。

ご意見に共通すると感じましたことは、そこにあった遺構を残せば良いとか、もしくは遺構を保存するような博物館のようなものを作れば良いとか、そういう単純な話では全くないのだということ。そして、この震災の中で、被災された方や活動に関わった方の「思い」もまた多様であり、そうした多様性を、それを伝える「人」を介して、何とかより広域的に、より未来に向かっ

て長いスパンで継続していく、伝えていく、その活動全体が、ある種「メモリアル」という形になるのではないかとこのように受け止めさせて頂きました。誠に難しい課題ですが、まさにその通りだなという思いで、これからのこの委員会の議論の深まりを楽しみにするところです。

お話を聴きながら私が思っておりましたことは、定禅寺通りのケヤキ並木がありますけれども、戦災後 68 年でしょうかね、その位になってきて、少なくとも 100 年の間は、このケヤキの並木を見ると、仙台市民は「ここはかつて空襲があった。戦後の復興の中でこのケヤキが植えられてきた」ことを思い出すと思います。一方で、仙台市は戦災復興記念館を持っております。このまちにとって、仙台空襲を市民の中に思い出させる装置として、ケヤキ並木と戦災復興記念館、この二つのものがどういう役割を果たしながら、市民に対しどう訴えかけてきていたのかと考えてみると、今日のみなさんのお話の色々なことが見えてくるのかなと思いました。

改めて、息の長い事業にするためにはどうしたらいいのか。行政というのどちらかというところ、なるべく早くけりをつけて、一丁上がりと言いたいところがある訳ですが、今日のお話の基調的な部分としては、なかなか終わらない事業こそがよい事業であるというようなことであろうかと思しますので、どうすればいいのかというようなことも伺えればと思いました。

○宮原委員長

どうもありがとうございました。

それではいまだ少し時間がありますので、もし皆さんの方で言い足りなかった部分、他の委員の皆様からお話を伺ってのご感想でも結構ですので、お手を挙げていただければと思います。阿部さんから高橋さんの列は控えめにさせていただいたようですから、何か付け加えたいことはございますか。阿部委員いかがですか。

○阿部委員

先ほど、いきなり災害ユートピアを出したんですが、災害ユートピアというのは大災害が起こった地域でしかユートピアができないと。ユートピアは何かと言うと、災害の中でも、人間として輝いて、生き活きとして助け合う姿。あの時魅力的なものができたけれども、大概の場合には、残念ながらそれはユートピアで消えていってしまうということです。

今、私達が問われているのは、仙台市のメモリアルだけではなく、日本の歴史の中で振り返った時にユートピアになってしまうのかどうか、ということが問われているのではないかと考えていて、ユートピアにしないようなメモリアルをつくって行けたらと思って最初に申し上げました。

しかし、この 2、3 年で既にユートピアの傾向がかなり表れてきているのではないかと。ですから、どういうメモリアルになるか、右往左往して足掻いている震災後の姿に見えるかもしれない。後年、それを見た時に、簡単には出来なかったけれども、震災後も苦しみの中から皆が住みたい都市仙台がつくられてきたというようなことが記録として、後から評価されればいいのかという思いで、最初に災害ユートピアの話しを出させて頂いたのですが、突然のご指名だったので、今のようことが分りにくかったらという、忸怩たる思いがあったので、少し発言をさせて頂きました。

○宮原委員長

一番大事な部分を言って頂きましてありがとうございます。他にいかがでしょうか。他にいかがでしょうか。

○間庭委員

本江先生のご発言に触発され、持論でもあるのですが、東北六魂祭というのが震災を契機に行

われています。被災3市を優先してまわっていますが、もう一周して、奥山市長さんが7回目は仙台だと非公式発言をされている。私個人としては、色々な課題はありますが、何とかこれを続けたい。震災をきっかけに、自分達が持っている祭りを一緒にやって、しかも各地をまわっている。被災地も、そうでない所も。ヨーロッパのお祭りでも、実はペストが大流行して、まちが壊滅的になった、そこから鎮めるために始めたと言うものも結構ありますよね。そういうのも「継承」には非常に大きな役割があるので、規模は大きな課題なのですが、何とか継続して、主体的に自立性を高めてやる事。それを見に来てくださる方も「あの時は大変だったね」とか「そういう事が100年前にあったそうだね」ということになるように、私は願いをしています。

6つもお祭りがあるということは、各市とも6年にいっぺんしか来ない。初めましてみたいな感じなんですね。開催するノウハウについては、仙台市さんなどが三回とも黒子になって大変お世話されています。こういう役割が、仙台市はもちろん民間も含めて「仙台」にはあるという意味で、メモリアル事業の一端に加えて頂きたいソフト事業だと思っております。

○宮原委員長

どうもありがとうございました。

私も最後に付け加えたいのは、人の活動や、自然の活動もそうなんですけれども、震災があっても切れることなく続いていく訳で、今回の仙台市さんのメモリアルの検討委員会のスタートというのが、これから200年後か400年後の防災活動の始まりであるということで、次の人達のためにしっかりと残していく、これも重要になってくると思います。

間庭委員さんのおっしゃった、祭りはとても長い時間継承されるものだと思うので、この六魂祭をそうやって100年とか200年続けながら、その意味が途絶えることなく続く。そういうものに、どうやったら出来るのかという所を皆で検討できたらなと思います。

今日、一回目でしたので全部言い尽くせなかった事があると思いますので、別途ご意見を事務局の方までいただければ大変有難いと思います。

また、今日のお話とそれから次回まで頂いたご意見を基に、次回の会議までにこれを整理して、皆様の方にご提示していきたいというふうに考えておりますのでよろしくお願いいたします。

(3) その他

○宮原委員長

それでは、その他ということで、事務局の方から連絡事項はありますでしょうか。

○事務局（梅内参事）

はい、連絡をさせていただきます。

次回の日程につきましては、概ね2ヶ月以内と考えておりますが、委員長等と協議をさせていただきます。改めてご連絡をさせていただきますと存じます。ご協力をお願いいたします。

また、今委員長からもございました追加のご意見等は、事務局にメール、ファックス等なんでも結構ですので、いただければ、次回までに加えて参りたいと考えております。

また先ほど西大立目委員から「地域の委員がいらっしやらない」というご意見がございましたが、東部の特にモニュメント等を考えていく上で、地域の方の意見というのは不可欠でございます。事務局の方でも地域の皆さんの意見を伺うような作業を行い、その意見を取りまとめて、この委員会方でもご紹介をしながら、そういった方々の思いも活かせるようなやり方を工夫して参りたいと考えております。事務局から以上でございます。

7 閉会

○宮原委員長

今回は本日の意見を整理した上で、具体的な議論を行いたいということで、今日いくつか課題といたしますか、さらに議論すべきところについて皆様にあげて頂きましたので、次回また活発な議論をして頂きたいと思います。

それでは以上で本日の委員会を終了したいと思います。今日は不慣れでなかなか皆様も言い尽くせなかったことあるかと思えますけれども、また次回、皆さんとお目にかかり、進めていきたいと思えます。

今日は皆さんありがとうございました。閉会といたします。

以上、議事録の内容につきまして、すべて相違ありません。

平成 25 年 8 月 / 日

議事録署名者

(委員長) 宮原 育子

(委員) 阿部 重樹